

## 中国古代医学と医心方

三 迫 初 男

少し大きい題目であります。まず中国古代医学の発達の状況を簡単にお話申しあげ、医心方はどんな立場で書かれたものかということ、いろいろ想像し、推定したことをお話してみたいと思います。

中国の古代の歴史を見ますと、最初に出てきますのが三皇五帝という名称でございます。紀元前三千年以上の古代のことかと想像されます。三皇というのは、伏羲・女媧じよか・神農とする説が普通であります。神農氏は農業を人民に教え、生活を楽にさせようと努力した王と伝えられています。従って植物のことに詳しく、医薬についても関心の深かったのは当然でありましょう。もちろん神農本草経というのは後世のものです。

また、黄帝は五帝の最初の人で、政治的な方面において大活躍をしましたが、当然戦争に強く、兵法にすぐれていました。科学的な鋭さを持っていたということです。また神仙の信仰者だったという伝説もあります。

神農氏は南方、黄帝は北方の人であるという解説を読んだことがあります。多くの伝説がありますので明確ではありません。黄帝は黄河のずっと上流の山西省、陝西省の方の人であり、神農氏も、黄河の東南方の農耕に適したところの人でしょう。南方と言っても揚子江の方ではないでしょう。五帝のうち、堯帝・舜帝も有名な聖人ですが、医学的には特別な記録はないようです。

紀元前一五五〇年ごろ、夏の禹王が立ち、それから殷の湯王、次に周の武王となります。夏の国の史料は非常に少ないのですが、殷の中期の亀卜というものが残っており、その甲に文字をきざみつけ、それを焼いて占いをしたのですが、その殷代の文字が残っているのであります。いろいろのことが書かれています。医学と直接関係のある文は、私の読んだ範囲では見当りませんでした。

殷の次の周になりますと、はじめ二〇〇年ほどは堅実な政治でしたが、その後国が乱れ、都も移り、東周と呼ばれる時代となります。東周の前半約三七〇年間は春秋時代と呼ばれ、四方の小国が戦を始め、其の後約一五〇年間は、戦国時代となります。いわゆる戦国の七雄といわれている七国の勢力争いの時代であります。互いに国内の政治を安定させ、武力を高めようとし、多様の文化が開かれてきたことも面白いことでした。

人民たちの幸福を守り、結束を高めるためには、まず栄養を十分にし、病氣治療を考えなくてはなりません。さらにまた、占いや、神への祈願ということも盛んになるのは当然でありましょう。

素問によれば、砭石へんせきは東方から、毒薬は西方から、灸せうは北方、九鍼くじゅうしんは南方から始まったと説かれています。春秋戦国の時代には、各地方の伝統的な治療法が他の国々に普及し、広く行なわれるようになったと思われまします。

儒教の始祖の孔子は、春秋末期の人ですが、四書五経の中の易経を見ますと、これは占いを主とする経書ですが、その占いの仕方には古代から伝えられた種々の方法がまとめられていると思われまします。

易の基本的な思想の一つは「陰陽」ということですが、陰陽という言葉は易経に二度ほど出てくるだけで、剛柔という言葉が多く使われているのは不思議です。

陰陽ということを簡単に申しますと、陰は日陰ひかげ、陽は日向ひなたのことなのです。それがだんだん思想的に発達して、天地とか男女を表わすものとし、さらに「氣」という概念と結びつき、人間の生活や人格、身体のことまで、非常に幅広くなつて参りました。陰陽思想のこのような発達も春秋時代から始まったもので、それが医学の方面まで伸びてきたという感じ

が致します。

もう一つ、「五行」という言葉がありますが、これもやはりこの頃から盛んに用いられるようになったものと推定されます。

五行というのは、はじめ書経のなかに見えていて、人間にとって一日も欠くことのできない大切なもの、水・火・木・金・土の五つがこれでありませう。これはそれぞれ性質、すなわち徳を具えているわけで、書経には簡単に記されていますが、春秋時代以後、たいへん難しいことになります。星にも水星・火星など五行の名がそのまま見えていますし、五色・五声・五味・五情・五臓などの概念ともなり、当然これは占いに結びつくようになっております。この人は木の性格だ、この人は火の性格というように人間をみて、木の性格の人は、火の性格の人には負けるというわけです。単なる性格ではなく、その人の運命ということにも発展しております。

戦国時代には山東省は占者の多い地方でしたが、すうた騶衍という占い師がいて、あの国はこの国に勝つだろう、この国はそちらの国には勝つだろうと占いをすると、みな必ず当たったそうです。五行相生、五行相剋こくという考えがこの当時から盛んになったということです。

人間の身体においても、肝胆は木、心小腸は火、腎膀胱は水の性というように、相生・相剋の作用のもとに結合し調和を保っていると考えられるわけですが、一種の生理学・病理学と考えてよいでしょう。しかし薬物の五行の性質もこれに含めて治療するということは、なかなか困難なことでしょう。

さきほど殷代の亀卜のお話をしましたが、周代の占筮も有名であり、貴族も庶民階級もみな巫みこ（みこ）を頼りにしていたようです。五行思想もこの占いと結びついて盛んになったと考えてよいでしょう。星うらない、雲うらない、数うらないや、手相・人相もあったと思われませう。巫醫という語がありますが、「醫」という文字は醫と同じ意味に用いられています。

また莊子のなかに、五穀を食わず、風を吸い、露を飲んで長生きをしている仙人の話が出ていますが、俗世間の生活を離れて、草根木皮を食べることなど、多くの人々の心のさざえとなったことでしょう。

春秋戦国時代が終りますと、次は秦の国となります。この国は三十数年で滅びますが、非常に変わった国であります。有名な秦の始皇帝は、封建制度を改めて郡県制度とし、中国全土の富豪も学者たちも都に集めました。いろいろ議論をさせたり書物を書かせたりしたらしいのですが、統一性が失われることになりました。そこで始皇帝の法治主義に反する者は穴埋めにし、儒教の書物などはみな焼きすてました。いわゆる焚書坑儒です。

その時、焼いてはならない書物として、第一は卜筮、占いの書物、第二には医学の書であり、第三には農業に関する書物でありました。このような命令によって、どんな書物が残されたか、具体的には不明ですが、秦の滅亡の時になくなった書物も多かったことでしょう。

秦の次に漢の時代となり、また昔の封建制度とし、孔孟の儒教を重視するようになりました。ところが、最もすぐれた漢の武帝は、政治道徳として儒教を貴びながら、神仙の道を尊ぶ人だったのです。史記の封禅書に、武帝が病気になる時、医者も治すことができなかったので、修験者に頼み、神に祈って治したことが書いてあります。武帝の孫、劉安が著した淮南子にも神仙の説が見えるし、著者不明の山海経も、恐らくこの頃に作られたものかと思われま

後漢になって、名医の名が見えて参りますが、道教の始まったことも考慮する必要があるでしょう。

章帝の頃、張道陵は、黄帝老子を祖とし、不老長生を求め、呪や神に祈ることを教えたのです。庶民階級に広く信じられ、医薬の効果にも結びつけられ、後世まで続くことになりました。これが道教と呼ばれるものです。

漢が減んで、北方に魏、南方に呉、西方に蜀が盛んになっていきます。これが三国志で有名な三つの国で、それぞれ特色のある文化を高めようとしています。けれども僅か四十年間の攻める守るの激動ですから、医学は進歩していると思いませんが、まとまった医書については不明です。

次に西晋・東晋と続き、次に南北に分裂して南北朝時代となります。この頃、王叔和・葛洪・陶弘景・楊上善などの医書が作られています。

北朝系の隋が天下を統一したのは五八一年ですが、六一八年には滅んでしまふのです。しかし煬帝は、秦の始皇帝と同じように、四方の文化を集めることに執念を燃やしています。北方の洛陽・長安と、南方の揚子江下流域を結ぶ大運河の完成は、実に大事業であります。南北の経済的、文化的交流に対して非常な功績があったと思われまふ。

この隋も、北方諸民族の攻撃に堪えかね、滅亡ということになり、次に二九〇年も続く唐王朝となります。唐の初期、有名な太宗が立ち、貞観の治と言われている充実した政治を行い、対外的にも発展しております。隋の律令制度や、科挙という官吏任用制度も整理し、太医令という医官を置き、医学校を諸州に設置し、医術をも大いに奨励しております。古典的な医書が整理されたことも有名です。

宗教の方面でも、道教のほかに、仏教が盛んになり、祇教・景教・イスラム教も流行するようになったのです。仏教的な医学も取り入れられ、僧侶たちが病気の治療に努力したことも有名な話となっています。

この唐も、玄宗の時の安祿山の乱以後だんだん勢力が衰え、ついに五代十国と呼ばれる乱世が約六十年間続き、やっと宋が天下を統一することになるわけです。

唐末において、どんな悲惨な状態であったか、唐書などの歴史や、詩などにも見えております。

太古の伝説時代から唐宋に至るまでの医学の状況はいろいろ想像できますが、このたびは医師の名や、目録に載っている医書の名も省略させていただきます。

医心方に引用されている医書は、約一九〇種もありますが、引用回数が多いものについて、少し考えてみましょう。

第一は「病源論」で、医心方に五五六回も引用されております。これは、新唐書芸文志に見える、巢元方の諸病源候論五十巻で、隋の煬帝の大業年間に、勅命によって編纂したものとなっております。隋書経籍志に、呉景賢の諸病源候論五

巻が記されていますが、巢元方の名が出ていないのが不思議です。恐らくこれは元来同じ書物で、何人が集まって作ったものでしょう。

病源候論は、素問や靈樞の思想にもとづき、各地の気象状況や病人の症状を集め、体系的に記したものと思われます。湯薬や針灸などについては、他の書物にあるからこの本には書かないと、時々記してありますが、これは恐らく、別の医官によって編纂されている本に書いてある、という意味でしょう。「四海類聚方二六〇〇巻」が隋志・唐志にみえていますが、これかも知れません。残念ながら、今は佚書となっております。

医心方に素問経(四回)、太素経(十三回)などの名は見えますが、ごく回数が少ないのは、病源論を主とし素問系統の引用は省略したのでしょうか。

第二、孫思邈の「千金方」は四七三回引用されています。「又云」とあるものを加えればその三倍か四倍になるでしょう。医心方卷一の「治病大体第一」の始めから引用されています。

孫思邈の伝記は、旧唐書・新唐書のほか、いろいろの書物に記されていますが、彼は子供の頃から学問が好きで、儒学にくわしく、老荘思想や道教を学び、官職につくことを拒絶し、医の道に進んだ人です。新唐書の隱逸伝によれば、彼は永淳の初(六八二年)卒す。年百余才。とあります。

千金方の内容をみると、症状、処方、針灸など、非常に多方面にわたり、詳細に記してありますから、医心方に多く引用されているのは当然だと思われれます。もつとたくさん引用してもよかったです。

第三、「葛氏方」から、三九六回引用されています。輔仁本草の書名欄にも葛氏方と記してありますが、日本国見在書目録には、葛氏肘後方十巻と記してあります。隋書経籍志に肘後方六巻、葛洪撰とあり、旧唐書経籍志に肘後救卒方四巻、葛洪撰、新唐書芸文志に、葛洪肘後救卒方六巻となっておりませんが、その内容はほぼ同じであります。

著者の葛洪は東晋の人、字を稚川といい、神仙の道を好み、仙人になるために金丹を煉る術を学んだそうです。その著

書「抱朴子」を読んでみますと、儒学にもくわしく、神仙の薬のことも詳しく書いています。しかし肘後方には、非常に簡単な処方が多いようで、肘後というのは、腕にかけて持ち歩くことであり、救卒というのは、突然の病を救う意味と考えられます。

医心方の多数の引用書のうち、以上三種の次に引用回数が多いのは、小品方・産経・録驗方・拯要方・范汪方で、本草経もよく引用されています。靈奇方とか令李方など、どんな書物かよくわからないものも多く、張仲景方の名は見えていますが傷寒論とは全く異なる処方であったり、多くの疑問があつて困っております。

医書を一つずつ取りあげるとは省略させていただき、次に医心方に引用される処方の特色について、一言申しあげたいと思います。まず第一、日本の風土、気象条件などをよく考え、日本人の身体に適した処方を選ぼうとしているように思われます。医師としての経験を重ねているようです。

次に手に入りやすい薬剤を選び、丸薬はなるべく避け、湯薬を主とし、塗り薬もよく用いられています。湯薬も二十味以上のものはあまり見られません。延喜式に見える典藥寮の記録などをみると、薬物を集めるのに苦労しているようですが、医心方の処方も、当時としては難しいものもあるようです。

また、千金方のところで申しあげたように、医心方も、針灸・本草・養生のこと、婦人科・小児科や、房内のことなど、広い範囲にわたっていることも、大きい特色と言えるかと思えます。

唐末五代において、それまで多く舶載されていた書籍が来なくなる。平安朝文化の最盛期だった日本は、唐が減んでもその学問は日本に残しておきたいと思つたでしょう。医学の方面においても、医書をよく整理しておくことが最も必要なことだと医師たちは考え、貴重な医心方は、そのような要望にこたえて誕生したのであらうと思われれます。

# Ancient Chinese Medicine and the "Ishinho"

by

Hatsuo SANNOHAZAMA

Shen Nung and the yellow Emperor become very famous figures in Ancient China around 2000 B.C. However, at the end of the last of the three ensuing dynasties; Hsia, Shang, Chou, China divided into seven separate warring states. At this time Chinese culture began to develop along with Chinese medicine.

The concepts of Ying and Yang and the five elements theory also were developed during the Shang dynasty. This influence not only natural philosophy, but also fortune telling. The physiology and the pathology of Chinese medicine came to be explained in terms of these concepts.

The Shung dynasty was overcome by the founders of the Qin dynasty, who went on to unify the warring China States. The Qin dynasty in turn succumbed to the Han dynasty. Under the Han dynasty government was conducted on Confucian principles, Taoism flourished and Drugs were used to prolong life.

The Han dynasty continued to rule for more than 400 years before it was succeeded by the three states, Tsin, the South and North dynasties and China was re-united under Sui dynasty in 589 A.D. In the space of only 30 years the government under the Sui dynasty constructed the Great Canal linking North and South China, enabling economic and cultural exchange, as well as reforming the govern-

mental structure, before it collapsed. It was succeeded by the Tao dynasty, which lasted around 290 years. During that period, many old medical books were collected and set in order. Medical Schools were also established and a national medical system set up, this Chinese Medicine became highly developed during this dynasty.

Most of contents of the Ishinho were consisted of citations from chinese medical books before and during Tao dynasty, which are more than 190 titles. "The Pin Yuan Hon Lun, the most cited book among them, was refered to 556 times, the next one is "the Chien Chin Yao Fang" refered to 473 times, the third one is "The Chou Hou Fang", 396 times.

The aim of this paper is to make clear the character of the Ishinho by the fact that the original sources and authors have been discussed.